

河合敦著「岩崎弥太郎と三菱四代」幻冬舎新書 155、幻冬舎、2010年1月30日刊を読む

1. (1) 岩崎弥太郎は、弥次郎と美和の長男として、天保5年(1834年)12月11日に誕生した。のちに大きな影響をうけることになる坂本龍馬より、1歳ほど年上になる。

(2) 弥太郎の生まれた岩崎家は、土佐国安芸郡井ノ口村に居をかまえる地下浪人の家柄だった。地下浪人というのは、土佐藩士(郷土)の身分を失った武士のことをいう。

(3) 岩崎氏の遠祖は、甲斐源氏の武田氏だというのが、家系が史実のうえではっきりしてくるのは、戦国時代以降のことになる。安芸郡の侍として、長宗我部元親に仕えた頃からだ。

(4) 元親は、土佐から出て四国を席捲したが、その子・盛親が関ヶ原合戦で家康に敵対したことで失領し、代わって山内一豊が土佐の領主として入国してきた。

このおり岩崎氏は一度、浪人となってしまうが、やがて郷土(下級藩士)の株を買って武士の身分を取り戻した。

(5) だが、岩崎弥次右衛門という数代前の先祖が酒と博打で家を傾かせ、岩崎氏は郷土株を他家へ譲渡して、弥太郎が生まれた頃は再び地下浪人の地位に転落していたのだった。

元武士とはいっても、地下浪人は、村では村役人たる庄屋(名主)の下位に置かれ、苗字帯刀が認められてはいたものの、その日常は何ら一般の農民と変わるところはなかった。とくに岩崎家の生活は、かなり苦しかったようだ。

(6) 因窮の一因は、弥太郎の父・弥次郎のせいでもあった。弥次郎は、農業経営が下手くそなうえ飲んでべえだったので、借金をしては田畑を手放していた。さらに頑固で意固地なところがあり、他人の過ちを黙って見過ごすことができず、ずけずけ物を言い、相手の落ち度を面と向かって叱責してしまう困った癖を持っていた。

(7) こういう人間を、土佐では「いごうそう」と呼ぶ。とくに酒に酔ったときに、弥次郎は近くにいる人間をひどく罵倒する酒乱の癖があった。

そんな性格から、庄屋の島田氏や岩崎家の分家とのイザコザが絶えず、いつも隣近所から孤立しがちで、村では不遇をかこっていた。
2. (1) そんな弥次郎の長男として生まれた弥太郎は、昼夜の別なく激しく泣きわめく、癩の強い赤ん坊で、母の美和も困り果てたらしい。その気性は少年時代にも引き継がれ、いたずら好きの荒々しいガキ大将となり、周囲の大人も持てあますほどになった。

(2) 南瓜をくり抜き、中に蠟燭を立てて墓場に置き、鬼火に見せかけて村人を驚かしたり、楠の古木の空洞に棲む狸を退治しようと、藁束を穴につめて火をつけたところ、それが古木に燃え移って危うく山火事になりかけたこともあった。

(3) ただ、優しいところもあった。あるとき自家が所有する山林から木を盗む者があるという噂を耳にした弥太郎は、盗人を捕まえてやろうと待ち伏せていると、泥棒が姿を現し木を切りはじめた。弥太郎が飛び出してみると、身寄りのない貧しい老婆だった。すると弥太郎は、老婆を捕まえるどころか、彼女の作業を手伝い、薪を持って老婆を家まで送り届けてやったのである。また、熊助という貧しい老翁のために、虚無僧姿になって村々を尺八を吹いて回って米を

恵んでもらったという逸話もある。

(4)けれど、学業のほうはてんでダメで、あまりの物覚えの悪さに、師匠から愛想をつかされ、たびたび塾をかえている。

3. (1)しかし、12歳の頃から、そんな弥太郎に大きな変化のきざしが見えはじめてくる。

儒学は相変わらず苦手だったが、詩作(漢詩)をはじめようになり、それが師匠に評価されたことで、いっそう詩作に熱中するようになったのである。

(2)凡庸な人間でも、かならず一つは光る才能を持っているという。それに気づいたとき、人は大きく脱皮して飛翔するものだ。しかし残念ながら、自分自身で己の才能に気づくことは稀である。たいていは、親や教師から指摘をうけて、はじめて己の能力を認知する。

(3)たとえば坂本龍馬も、泣き虫で勉強ができず、塾を退学してしまったが、姉の乙女が根気よく龍馬に学問や武芸を教え込み、やがてその剣才を見出してやったことで、彼は大きく羽ばたくことになった。

(4)なお、弥太郎と同時代を生きていた吉田松陰は、そうした才能を見出す天才といえた。松下村塾での教授期間はわずかに2年、にもかかわらず高杉晋作、久坂玄瑞、伊藤博文、山県有朋、品川弥二郎など、彼が世に送り出した逸材は枚挙にいとまがない。松陰は、弟子をよく観察し、その長所を見極めたうえで、はっきり本人に告知してやったという。

(5)弥太郎の場合は、師匠の小牧米山がその役割をになった。ゆえに弥太郎はこの恩を忘れず、後年小牧の徳をたたえる記念碑が建てられることになったさい、その費用の一部を喜んで負担している。

4. (1)弥太郎が14歳のとき、藩主の山内^{とよてる}豊照が安芸郡に巡察に来た。豊照はたびたび領内を巡回し、優秀な者に賞を与えていた。このおり弥太郎は、師匠の小牧米山とともに藩主を奉迎する詩をつくって捧げた。

駸々(しんしん)として車馬東に向って過ぐ
正に小春に会し風色多し
梅は香唇(こうしん)を発し猶(な)お喜笑するが如く
鶯は洪舌を調して恰(あたか)かも春に和す
文明の化村々の俗に及び
秋熟し歆び伝う処々の歌
仰ぎ望む寛仁の量海の如く
山童早く已(すで)に恩波に浴す

(2)とうてい14歳の少年がつくったとは思えぬ立派な詩である。ゆえに豊照は、見事な詩だとして弥太郎を褒め、褒美に扇子と銀を下賜したのである。

(3)かつて誰の手にも負えなかった悪ガキが、郷土の秀才に変じた瞬間であった。

5. (1)藩主から褒められた少年弥太郎は、ますます向学心に燃え、15歳の春、高知城下に出て岡本^{ねいほ}寧浦の塾「紅友舎」に入り、その屋敷に寄宿するようになった。

- (2) 寧浦は、母・美和の姉・時の夫にあたる。安芸郡の乗光寺に生まれ、将来は父の後を継いで住職になる予定だったが、これを拒んで京都へ出、西本願寺で仏教を究め、さらに芸州高田郡の専修寺で修行を積んだが、儒学者の頼春水(頼山陽の父)から儒学を学ぶ機会を得、最終的に仏教を捨てて儒者の道を選んだ。
- (3) やがて寧浦は儒者として高名になり、備前の池田氏が寧浦を雇用しようとした。これを知った土佐藩主・山内豊資が、寧浦を土佐に召還し、藩校・教授館の教官に抜擢したのである。やがて教官の職を辞し、紅友舎を開いたが、大阪で幕府に叛旗を翻した大塩平八郎とも交流があったという。
- (4) 寧浦は、講義の後でかならず門下生に酒を出した。塾にはいつも朱塗りの酒樽が置いてあるのだ。そして互いに盃を傾けながら塾生たちに詩文や偉人について自由な討論をおこなわせたのである。
- (5) 塾での寧浦は、とくに易学や歴史を重視して教えたというが、それが弥太郎を歴史好きにさせていったらしい。
6. (1) この頃から弥太郎は、『三国志』や『水滸伝』などの英雄が活躍する歴史書や講談を読みあさるようになり、そうした書物に感化されて自己を英雄視し、「将来自分は、世の中に名を成すだろう」と公言するようになった。
- (2) ところで、弥太郎に限らず、多くの歴史人物の生涯をひもといていくと、面白い共通点があることがわかる。
- (3) それは、偉人の多くが少年期を過ぎてからも、弥太郎のように大風呂敷を広げつづけていることである。平然と周囲に大言壮語を吐いているのだ。
- (4) 「大リーガーの選手になりたい。総理大臣になりたい」と言っていた小さな子供たちは、たいてい高校生ぐらいになると、そうした夢を語らなくなる。現実と自分の才能を考えて、とても無理だと判断してしまうからだ。小さい頃の夢を大人になってまで持ちつづけるといのは、かくも難しいことなのである。
7. (1) ところが、偉人は違う。彼らの大半は、大人になってからも夢や大志を捨てることがないのだ。世の中の現実といったものを考慮しないのである。いや、できぬのかもしれない。
- (2) 真剣に自分の才能や置かれた環境を熟考すれば、どう転んでもそんな大きな夢が実現するはずはない。にもかかわらず、目的に向かって突き進んでしまうのは、ある意味、性格の欠陥だといっても差し支えないだろう。
- (3) しかしながら、天は不思議である。
- (4) そういう人物に味方するのである。
- (5) 豊臣秀吉にしろ、新井白石にしろ、本来ならばとても天下を動かすような境遇にはなかったはずだ。しかしながら、現実には彼らは歴史に名を残してしまっている。弥太郎と同時代・同郷の人物ならば、坂本龍馬がまさにその典型だろう。龍馬も大言壮語の癖があり、姉への手紙に「日本を洗濯する」とか「土佐二十四万石を率いて、天下国家のために行動するつもりだ」といった大風呂敷を広げている。
8. (1) さらにいえば、どうやら、人格と栄達とは、全く無関係なようである。善人や悪人の別なく、

天は大志を抱きつづける人物を引き上げる傾向が明瞭に見てとれる。これは断言してもいい。これから述べる岩崎弥太郎だって、決して聖人君子とは呼べない部類の人間だ。

(2) おそらく、信じることなのだろう。願いはかなうと信じてただひたすらに突き進めば、不思議と夢は現実になる。一切に疑念を挟んではいけない。いくら表面的に夢を実現するんだとがんなばっても、心の底でダメかもしれないと疑っていれば、どうやら天は味方してくれないらしい。そういった意味では、人生は馬鹿の勝ちである。

弥太郎は、まさに大風呂敷の馬鹿者だった。

(3) それについては、こんな話がある。

あるとき弥太郎は、歴史の授業中に塾生たちを前に、

「もしも俺が宰相だったら、こんな愚策で国家を滅ぼすことはしないだろう」

と偉そうなことを言った。そのセリフを耳にした塾生の野中伝太は、

「お前はいったい、将来何様になるつもりだ」と尋ねると、

「治世の能吏^{のうり}、乱世の姦雄になるのが、自分の夢だ」

そう平然と答えたので、以来、野中の、弥太郎を見る目は変わったという。

(4) また、弥太郎は、文字がものすごく下手くそだった。それを塾生たちにか罵らかわれたさい、「べつに構わぬではないか。俺は将来出世したら能筆家を雇うつもりだ。算盤の上手も雇うだろう。だから、字など下手でもよいのだ。諸芸に秀でようとして、枝葉末節の技術に時間をかけるのは、無能者がやることさ」

そううそぶいたと伝えられる。

9. (1) 弥太郎の大志は、生家の庭を見るとよくわかる。弥太郎の生家は、高知県安芸市に現存する。藁葺きの簡素な家である。玄関を上がると九畳の居間と八畳の表座敷があり、その裏手に狭い控えの間があるだけだ。その表座敷の小庭に、いくつもの庭石が奇妙なかたちに配置されている。とてもそう見えないが、これは日本列島をかたどったものだそうだ。居ながらにして日本全土を俯瞰しようと、弥太郎が自らつくったという。なんとも気宇壮大な発想だ。弥太郎の生まれた井ノ口村の高台に登ると、太平洋を眼下に望むことができる。少年時代の彼は、何時間でも海を眺め、時には海原に出て波乗りをし、「大人になったら太平洋を横断してやる」と豪語したという。

(2) 弥太郎の偉さは、大風呂敷を広げるだけではなかった点にある。誰よりも勉強したのだ。昼間は悠々と遊んでいたが、夜が更けると、人知れず、行灯の明かりの下で必死に机に向かっていたのである。そうした努力があっただけで、弥太郎は人に抜きんできたわけだ。

弥太郎は16歳のとき、井ノ口村に戻った。「いごっそう」な父の弥次郎が分家の岩崎寅之助や鉄吾と何度も諍いをおこし、弥次郎に呼び返されたのである。

それから3年間、弥太郎は井ノ口村で過ごしたが、19歳のとき再び寧浦のもとへ戻った。しかし翌嘉永6年(1853年)10月、寧浦は60歳で生涯を閉じてしまう。寧浦には子供がいなかった。ために紅友舎の塾生たちは弥太郎が寧浦の遺志を継いで岡本家の家督を相続し、塾を継続してくれることを強く望んだ。だが、実父の弥次郎が「嫡男を養子にはやれぬ」と同意しなかったため、その話は立ち消えとなったと伝えられる。

(3) 仕方なく弥太郎は再び生家に戻った。だが、ちょうどこの時期、ペリー艦隊が浦賀に来航し、幕府に開国を強く迫っており、そうした強硬な姿勢に対して、世論は沸騰、土佐の若者たちの

間でも攘夷思想がものすごい勢いで膨脹しはじめていた。

- (4)また前年、岩崎一族の分家で鉄吾の嫡男・馬之助が江戸に留学していた。馬之助は弥太郎と同じ岡本寧浦の塾生であり、非常に優秀な若者で、弥太郎にとってはよき友でありライバルだった。そんな馬之助が江戸から、「君も江戸へ出てきたまえ」と書簡をよこす。
- (5)そんなことから弥太郎は、江戸に遊学したいという思いが抑えられなくなり、両親に自分の気持ちをぶつけてみた。
- (6)だが、弥次郎は首を縦に振らず、母の美和も「あなたは取り替えることのできない岩崎家の長男なので、どうか我慢しておくれ」と哀願されてしまった。
- (7)けれど、その思いはもはや抑え切れず、ちょうど知り合いの儒者である奥宮^{そうさい}慥齋が江戸詰となり、近々江戸へ向けて出立するという話を聞くと、居ても立ってもいられず、その屋敷を訪ね、己の宿志を奥宮に告げ、何としても供の一人に加えて頂きたいと哀願したのであった。この熱い気持ちに動かされた奥宮は、従者として同行することを認めてやったのだった。
- (8)喜んだ弥太郎は、ただちに安芸郡奉行所で出府の手続きをってしまった。
- (9)こうなっては仕方がない。弥次郎と美和も弥太郎の江戸行きを了承し、息子のために先祖伝来の山林の一部を売却し、遊学の費用を出してやったのである。

10. (1)かくして 20 歳のとき、弥太郎にとっては宿願だった江戸への遊学が決まった。このおり、弥太郎は近くの妙見山に登った。標高 433 メートルのこの山の頂上付近には、星神社が鎮座する。弥太郎はその社殿の扉に、

天下の事業はこの手腕にあり
吾れ、志を得ずんば、ふたゝび此の山に登らず

と大書したと伝えられる。

- (2)地下浪人の子として赤貧の家に生まれた岩崎弥太郎　それでも彼は、そんな境遇に押し潰されることなく、胸がはち切れんばかりに己の将来に期待し、「きっと自分は何者かになる！」そう信じて、江戸へ旅立っていったのである。

P12 ~ 22

[コメント]

渋沢栄一翁とは、また別の道をたどって三菱という形で日本の資本主義の基礎を築いた岩崎弥太郎の少年・青年期は興味深い。よい先生に恵まれることが人の可能性をとことん伸ばす。よい先生とはどのような先生かを本書から学びたい。

— 2014 年 1 月 11 日 林 明夫記 —